lymphoma 治療時の肺びまん性疾患の出現を増加させる可能性が示唆された．

9. 副腎皮質癌に対する核医学検査の意義 ——CT, MRI との対比——

山崎　哲郎　　丸岡　　伸　　清治　和将
山田　章吾　　（東北大・放）

副腎皮質癌 6 例の画像所見につき検討した．CT, MRI では従来の報告と大きな違いはなく，内部不均一な性状・造影剤増強効果を呈したが，5 cm 以下の比較的小さなものが 2 例あった．副腎皮質癌に特異的な所見はなかった．核医学検査は ^{131}I-adosterol による副腎シンチグラフィと ^{67}Ga シンチグラフィについて所見を検討した．^{131}I-adosterol は検査を施行した 5 例中 4 例で陽性集積像を，1 例で集積欠損像を呈した．腫瘍に集積が認められる場合は腫瘍が副腎皮質由来であることを確認するのに有用と考えられた．^{67}Ga は検査を施行した 4 例中 3 例に集積が認められたが，腺腫例でも集積が認められることがあり，副腎癌との診断に有用とはいえなかった．

10. ^{99m}Tc-MAG$_3$ 腎シンチグラフィにおける多変量解析からの split ERPF の推定

山本和香子　　秀毛　範至　　尾野　英俊
高塩　哲也　　油野　民雄　　（旭川医大・放）
佐藤　順一　　石川　幸雄　　（同・放部）
水永　光博　　金子　茂男　　八竹　　直
（同・泌尿器）
小川　裕二　　菊地健次郎　　（同・一内）

split ERPF をシンチグラムおよび視覚的パラメータから推定を試みた．23 例 (43 腎) につき 8 点採血により求めたクリアランス (CL) を標準とし，数量化理論 1 類に基づく多変量解析を用い各パラメータの CL への寄与につき検討した．CL とレノグラムから求めた split ERPF の間には正の相関があった．また多変量解析より initial renal visualization time, kidney-to-background activity ratio at 2 min, parenchymal retention at 30 min, kidney-to-aorta activity ratio in blood flow phase が split ERPF をよく反映していた．

11. 核医学検査データベースを用いた ^{99m}Tc-DMSA 検査の分析

伊藤　和夫　　加藤千恵次　　塚本江利子
鐘ヶ江香久子　　中駄　邦博　　望月　孝史
志賀　　哲　　山室　正樹　　玉木　長良
（北大・核）
荒井　博史　　表　　英彦　　勝浦　秀則
鈴木幸太郎　　（同・放部）

核医学検査データベース (DB) に登録されている全検査数は 55,386 件で，そのうち ^{99m}Tc-DMSA の検査数は全検査数の 929 件 (1.67%) であった．このデータをもとに，検査人数，検査年齢分布，検査回数等に関して分析した．全症例数は 538 名で，4 歳以下が 30% で，複数回の検査症例は 40% で，15 歳以下が 90% を占めていた．^{99m}Tc-DMSA は予想していたように小児で複数回施行されることが多く，一方，4 歳以下では男子の検査が多いことは予想外の結果であった．検査の DB は検査全体としての傾向を知る上できわめて有用であるが，個々の症例の検査病歴の把握にも適応できるシステムの開発が今後の課題と考えられる．

12. ^{99m}Tc-GSA 肝集積曲線に及ぼす食事の影響

秀毛　範至　　高塩　哲也　　山本和香子
尾野　英俊　　薄井　広樹　　斉藤　泰博
油野　民雄　　（旭川医大・放）
佐藤　順一　　石川　幸雄　　（同・放部）

正常成人ボランティア 4 例を対象に，^{99m}Tc-GSA 肝シンチグラフィならびに SPECT を 12 時間以上の絶食時ならびに食後 30 分に施行した．静注後 10 分間の肝，心の時間放射能曲線をもとに線形 3 コンパートメントモデル解析を施行し，肝血流 (F)，肝クリアランス (C)，レセプタ量指標 (R)，肝内血流量 (H) を直接積分線形最小 2 乗法により求め，SPECT より肝容積 (V) を求めた．これらのパラメータの食事前後での増加率を検討した結果，F (46±12%)，C (23±12)，H (78±24%)，V (16±7%) には有意な上昇が認められたが，R (−3±15%) には有意な変化は認められなかった．食後の ^{99m}Tc-GSA 肝集積曲線は，肝血管床ならびに肝血流の増加を反映した変化を示した．

Presented by Medical*Online